

<書評>

横井敏郎編著

『子ども・若者の居場所と貧困支援 学習支援・学校内カフェ・ユースワーク等での取組』
学事出版 2023年3月

大多和直樹（お茶の水女子大学）

本書は、教育保障・若者支援に造詣が深い教育行政学者・横井敏郎による科研費プロジェクトの一環として刊行されたものである。子ども・若者への貧困支援は、学習支援の形を取ることが多いが、本書は学習支援のみにとどまっていたのでは十分に支援をおこなうことができないというところに貧困支援の本質を見いだしている。

他方、評者は教育社会学を専門としているが、その界限では教育格差の拡大の背景に貧困問題があり、それらが負のスパイラルとして作動しているということが多く研究されている。そこでは、自然、負のスパイラルを打ち切ることへの期待として、子ども・若者の学習支援を充実化すべきという考え方が出てきやすい。しかし、本書によれば、第一に子ども・若者の学習支援がそれほど単純に成立するものではないこと、そればかりか第二に、そのような学習支援一辺倒の見方では貧困支援の本質を捉え損ねてしまうことになるという。これは本書を貫く考え方であり、評者にとっては重く受け止めなければならない指摘である。

本書の読み方としては、研究のスタンスを明確に押さえておくために、支援の「実践をどう捉えるか」を理論的に論じる終章から読むやり方があり得るように思われた。本書は支援の実践に対して突きつけられる厳しい疑義を引き受けた上で、実践の意義を探っていくものとなっており、このことが終章を読むと明確に理解できるからである。すなわち、支援に突きつけられる疑義とは、第一に「子どもの貧困」という視角自体が「大人の貧困」という根本の問題を覆い隠す（大人の貧困に手を着けずとも子どもに支援すればよいという考え方に陥る）危険性を有していること、第二に、支援によって人的資本としての資質・能力を高め貧困から脱却させることが重要という「貧困の個人主義的理解」を招くことである。第二の点では、貧困の世代間再生産（スパイラル）という考え方は、貧困の個人責任論にもとづくものであり、貧困問題を教育機会の問題にすり替えるものであるとされる。ここでは、先述したような、貧困を生む配分状況の改善抜きに格差問題を個人への支援によって解消しようとする—個人が学力をつければ貧困から脱出できるはずだ—という考え方などは手厳しく批判されることになる。

本書は、このような批判を引き受け、学習支援の限界を踏まえた上で、「子どもたちの関係性を育み、居場所ともなっている」(p.180) という支援教室のもう一つの側面に期待を寄せていく。すなわち支援そのものは貧困を生む社会システム自体を改革するものでは

ないとしながらも、改革の見通しが立たない中で「システムを『飼い慣らしていく』こと」、つまり学習支援の場が人的資本としての能力形成に絡め取られた「非真性社会」（レヴィ＝ストロースの二重社会論）の性格を有する中で、その場のあり方を自分たちなりに解釈し意味づけることによって支援教室を人間関係やケアの場である「真性社会」に転換させていく実践が目指される。しかも、学習支援教室が自動的にこのような「真性社会」になり得るわけではなく、本書で取り上げる諸実践は、まさに支援教室を「真性社会」として成立させることを企図する取組ということになる。

本書の構成を示すと第1章～第6章においては、章ごとに各担当者がそれぞれ学習支援事業を取り上げ、その意義と課題が検討される。この際、各章の事例を「真性社会」の実現を目指す実践としてみていくとより取組の意義を感じやすいだろう。ただし、ここでは学習支援にとどまらない支援の重要性への言及が多々なされるものの、学習支援を軽視しているわけではないことを付け加えておきたい。具体的には、都市部（第1章）、町村部（第2章）で地域特性ごとの特性を踏まえて意義と課題が検討される。第3章では、貧困対策の法制度化によって逆説的に非営利団体が民間企業との競合関係になる「レッドオーシャン」状況が生起していることが指摘される。まさに支援の制度的充実化のパラドクスを問うものとなっている。続く第4章は、「さいたまユースネット」の事例から、支援事業と学校教育の関係性の問題や事業の公益性と効率性の問題など、支援のあり方を構造的に検討している。そして、コロナ化におけるつながりの場（第5章）や学習支援の場という政策的位置づけを超えた居場所（第6章）の実践をもとに「システムを『飼い慣らしていく』」ケアの側面の重要性について論じられる。

そのうえで、第7章・第8章は、おもに「高校内居場所カフェ」という居場所の実践にフォーカスを当てた章である。支援は、安心して話すことができる空間づくりから始まり、信頼関係が生まれることが本音の相談ができることが必要だという。そこから「交流相談」という方法が生み出された（第7章）。第9章、第10章は、学校外の育ちの場であるユースワークについて、国内・海外のユースセンターに注目した章であり、ここでも居場所が支援のキーとなっていることが理解できる。

最後に、本書に賛同しつつ、付加的な意見を述べさせていただくと、現在、選抜や競争に用いられる道具的な学力以前に、小学校段階の基礎さえ身につけていない生徒が困難校・貧困層を中心に少なくない。こうした基礎学力の欠如は、生活上の関心や社会との関わりを狭めることにつながる可能性があり、競争や選抜のための学習と一線を画す「真性社会」においても必要な学力と考えられる。そうだとすれば、本書の実践では学校で出された宿題を行う支援等が中心であったが、将来的には基礎学力の社会的保障につながる学習支援への展開があり得るように思われた。いずれにしても、貧困支援において居場所の支援を重要視する本書は、本質を見抜いたものであり、子ども・若者の貧困支援の領域で多く参照されることとなるだろう。